JOURNAL OF KYOTO PRINTING INDUSTRY ASSOCIATION

VOL.662

京都府印刷工業組合

春号
SPRING ISSUE

京印季報
Kyoinkiho

2023 SPRING

Special Contents:
春季特別企画
「サーキュラーエコノミーで描く成長戦略」
座学編＋研修ツアーレポート

illustrated by Masahiko KIMURA

目次と巻頭言

2023 SPRING

1　巻頭言／副理事長　藤井　康央
2　春季特別企画
　経営革新マーケティング委員会企画
　～2030年の印刷業～
　「サーキュラーエコノミーで描く成長戦略」
　座学編+研修ツアー レポート
5　令和５年新年互礼会開催
6　第２回スポGOMI大会in西院開催
6　令和４年度親善ボウリング大会開催
7　「京都ビジネス交流フェア2023」に
　ブース出展
8　令和４年度近畿地区印刷協議会例会開催
9　京都府印刷企業の業賃金実態調査
11　官公需対策勉強会開催
11　よしみ散歩　～印刷会館周辺地域のご紹介～
12　委員会だより／共済委員会
12　会合だより／京都府印刷関連団体協議会
13　京都青年印刷人月曜会
14　京都印刷協和会
14　組合員NEWS
16　統計だより／印刷産業関連指標・京都商工業
　統計（印刷業）より
17　印刷会館利用状況
17　組合日誌
17　事務局からのお知らせ
18　2月・3月定例理事会開催概要
18　組合員異動
18　パートナーシップ会員異動
18　表紙作画者紹介
18　編集後記

https://kyoinko.jp/

この季報が届く頃には、７年振りに祇園甲部歌舞練場で柿落とし公演として「都をどり」が開催しています。京都らしい季節感が戻り、京都に住む一人として嬉しく思います。歌舞練場は耐震改修の他、玄関ロビーの新設や隣接地に帝国ホテルがオープンするようです。

新型コロナウィルスも５月に５類感染症に移行の見込みで、マスクを始め生活様式も戻るというより、歌舞練場と同様、新しい価値観を持った生活様式が作られていくと思います。

さて、今年に入り、コロナ禍以前と比べると為替も相当円安に振れており、外国人観光客にとっては、割安な買い物を楽しまれています。逆に私たちが海外へ行くと、割高感を感じてしまいます。株をやられている方は、日経平均株価の動きで一喜一憂しますが、仮に日経平均株価が28,000円でも、アメリカドル（外国）から見ると、１ドルが100円なら280ドル、140円なら200ドルと、30％ほど違う価値になり、これからは日本から見た視点と外国から日本を見た視点の双方向からの洞察が必要になるかもしれません

また、マイナンバーカードなどで代表されるように、デジタル化もコロナ禍で相当進みました。海外旅行からの帰国では、検疫・入国審査・税関申告を事前Web入力で手続きするVisit Japan Webサービスが始まりました。便利ではある反面、モバイルやパソコンが苦手な人にとっては海外旅行のハードルが高まるかもしれません。海外ではキャッシュレスも相当な勢いで進んでいます。

デジタル化・為替・キャッシュレスの他、リモートも含め、急すぎる新様式への変化の中で、アナログの代表「紙」が持っている、人への優しさ、温かさやお手伝い出来る役割を、我々印刷人が再認識する必要性を感じています。

京都府印刷工業組合
副理事長　藤井　康央

2023
春季
特別企画
SPRING SPECIAL PROGRAM

2030年の印刷業

サーキュラーエコノミーで描く成長戦略

座学編＋研修ツアーレポート

経営革新マーケティング委員会／委員長　江戸　孝典

座学編の講師を務める安居昭博氏

「たねやグループ」の会社説明

座学編で質問する高橋月曜会会長

「ラコリーナ近江八幡」展望室より八幡山を望む

「環境負荷低減と経済成長の両立」を目指す『サーキュラーエコノミー（循環型経済）』が、今世界中で注目されています。経営革新マーケティング委員会では「2030年の印刷業」をテーマに、SDGsとも親和性が高く、実現に向けた有効な手段の１つになりえる『サーキュラーエコノミー』を研修するため、座学編と実践企業の研修ツアーの二部構成による研修・見学会を企画・開催しましたのでご報告致します。

座学編

【開催概要】

主　催　経営革新マーケティング委員会
共　催　教育委員会
　　京都青年印刷人月曜会
日　時　令和５年２月21日(火)
　　午後６時～７時30分
会　場　京都印刷会館・オンライン
講　師　安居　昭博氏(Circular Initiatives&Partners 代表)
参　加　33社42名

■サーキュラーエコノミーとは

サーキュラーエコノミーとは、リニアエコノミー(大量生産・大量廃棄)、３Rエコノミー(リサイクル・アップサイクル)と違い、「廃棄」されない仕組みづくりに最大の特徴がある。

■京都での取り組み

サーキュラーエコノミーの眼鏡をかけると地域の課題が可能性に、廃材が宝の資源に見えてくる。コロナ禍で福祉作業所の仕事が減っている課題と、食品の廃棄物という課題に対して、京都の副産物を活用してドイツの洋菓子であるシュトレンの専門店を立ち上げた。原材料におから、酒かす、和菓子の端材などを使用。資源循環をビジネスに組み込んだ点が評価され、メディアにも取り上げられた。

梅小路公園で毎年行われる京都音楽博覧会では、「資源が“くるり”プロジェクト」と題して生ごみコンポストの実践とロス食材アイスの開発・販売を行っている。

大丸松坂屋、小川珈琲、京都信用金庫など30以上の団体が「エシカル・フードロス・アライアンス」を運営。これまで産業廃棄物として処分していた食材の情報をネットワーク内で共有し活用している。

■ヨーロッパの事例

ヨーロッパの金融機関ではサーキュラーエコノミー型のビジネスモデルを正しく評価して融資に繋げようという動きがある。

▶ インストック(オランダ)

地域のスーパーマーケット等から一流シェフが廃棄食材を調理し、リーズナブルな価格(2,000円から4,000円)で提供。

▶ サークル(オランダ)

解体時に分解できる設計の建物。接着材を使用していない。オランダでは標識、信号機等、あらゆるものが分解できる工法で建てられている。

▶ フィリップス(オランダ)

空港等に設置する照明器具や医療機関向けの1台数億円するCTやMRIをリース型モデルに転換。サーキュラーエコノミー事業で全体収益の15％確保を達成。2025年までに25％を目指す。

▶ Fairphone(オランダ)

カメラやヘッドフォンモジュールを単体で交換できるスマートフォン。2020年３月、EUでは「循環型経済行動計画」が発令され「修理する権利」が盛り込まれた。消費者自身が修理できる設計になっていなければならない。

▶ アディダス フューチャークラフトループ(ドイツ)

サブスクリプション・月額制のスニーカー。本体、紐、底に同じ単一素材を使用するなどサーキュラーデザイン(部品点数を減らす、有害物質は使わない、単一性素材の利用を重視、ネジを統一等)を採用。

■リジェネラティヴ・ビジネス(他社と共創する取り組み)

サーキュラーエコノミーの三原則の一つ「Regenerate Natural System(自然システムの再生)」を取り入れたビジネス。サスティナビリティやサスティナブルより上位の概念。

▶ 検索エンジンEcosia

広告収入を植林活動を行うWWFに寄付。

▶ SANU 2nd Home(月額制セカンドホームCABIN)

岩手県釜石市で放置されている杉材をSANUのチームが積極的に活用。その後、釜石に最も植わっていた樹木を植えて森を蘇らせる。

▶ Seeds Paper Pavilion(竹中工務店)

生分解性素材とシードペーパーを用いた大阪万博のパビリオン。大豆などを由来にした植物性の素材をもとに３Dプリンターで建物を建て、Seed Paper(紙にブナやクヌギやナラの種を織り交ぜて作られたものを)を塗る。建物は土に戻り、種は発芽して森に還る。

▶ パタゴニア ロング・ルート・ベールエール(アメリカ)

ビールに使う穀物に土深くまで根を伸ばすカーンザ種を選択。ビールを作ることで荒廃して水気のない土地を肥沃な大地に戻していく。

■サーキュラーエコノミーへのアプローチ

京都市では2019年の一般廃棄物の量が2000年比で半減している。インバウンド需要があったにも関わらず削減できたのは、サーキュラーエコノミーに対して様々なアプローチをしているからである。その中の一つ、社会

実験的なアプローチである「販売期限の延長等による食品ロス削減効果に関する調査・社会実験」をご紹介したい。

市内スーパー10店舗において、一部加工食品の販売期限を賞味期限・消費期限当日まで延長して販売した結果、廃棄物量が31.8％減少、売上金額が２％増加するとともに、本実験に95％の消費者が良いと評価するなど良いことづくめだった。

印刷業がサーキュラーエコノミーに取り組む際のファーストステップとしては、インクや紙等の廃棄の現状と情報をオープンな形で共有することだと思う。情報が共有されることによりアプローチの方法が見つかることが多い。また、印刷業界だけでなく異業種の企業とも連携することでヒントが見つかる可能性が一層高まる。

研修ツアー参加者

研修ツアー

【開催概要】

主　催　経営革新マーケティング委員会
共　催　京都青年印刷人月曜会
日　程　令和５年３月２日(木)
見学先　ラコリーナ近江八幡　他
参　加　22社24名

この度の研修ツアーの見学先は、「自然に学ぶ」をコンセプトに、お菓子や自然を存分に楽しめる施設として企画された、たねや クラブハリエのフラッグシップ店である「ラコリーナ近江八幡」。

午前９時30分、現地に到着して早速ガイドツアーに出発。メインショップや田んぼとともに、展望室、パームファクトリーなど、普段は訪れることができないバックヤードを順に巡る。50年、100年計画による現地の植生にあわせた森づくり、ライブ感あふれるガラス張りの工房など、自然との共存や人々が集う繋がりの場を意識した設計思想を体感した。

小憩の後、午前10時40分より、同社の執行役員経営本部本部長の小玉恵氏による会社説明が行われた。初めに“たねやグループ”の経営理念、多様な働き方を支援する様々な社内プログラム、地域との交流を促すイベント等を紹介頂いた後、フードロス削減と資源の循環の取り組み、地域環境への配慮と保護を目指した持続可能な社会づくりへの取り組みなど、「新しい循環(習慣)をつくる」をモットーとした同社のサーキュラーエコノミーへのアプローチについてじっくり研修することができた。

座学編・研修ツアーを了えて

経営革新マーケティング委員会／委員長　**江戸　孝典**

環境のことを考えるのは良いことですが、そもそも何のために取り組むのかを考えることが大切です。企業として取り組む以上、自社の成長に繋がらなければ、意義も継続性も生まれません。サーキュラーは、「稼ぐこと」にも繋がる取り組みやビジネスモデルです。PR目的だけでなく、経営者と従業員がともに「やりたいから、心地良いからやる」となれば理想的です。

予て環境問題に取り組んでおられる組合員もおられるでしょうが、これから取り組まれる皆さんは、先ず自社が使用する資源・エネルギー、廃棄物などを把握することから始めませんか。自社を知り課題が明確になれば、社外に伝えることができます。自社にとっての課題も、それを活用したい企業が存在する可能性があります。

印刷組合の横の繋がりも大切ですが、サーキュラー実践には縦の繋がりが肝要です。研修先のたねやグループは、自社の成長・持続可能性の観点で様々取り組まれていました。従業員・地域の理解や協力を得るまでは、汗をかく根回しの時間が大半で、今もなお試行錯誤されているとのことですが、今後も仲間を増やしながら取り組んで行きたいとのことでした。2030年の印刷業をどう描くかは、私たちの行動にかかっています。

（文責　編集委員会）